2002 年度 修了

子ども・親・学生ボランティアによる不登校の「居場所」づくり実践の一考察
―子どもを「抱える環境」としての「枠組み」形成と「場の発展」に伴う課題の変化―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
人間形成・臨床教育クラスター

本論文は，「不登校」・「思春期」をキーワードとした子どもが集う「居場所Ａ」の活動に，筆者がボランティアとして関わった１年２ヶ月の実践記録である．居場所Ａは，不登校の子どもが家にひきこもっている段階を経て，次に子ども同士で安心して遊べる場を設けることができないかと，親たちによって立ち上げられた場である．筆者が関わる以前の約半年の活動経過においては枠組みの緩やかなグループが形成され，主に昼食作り等の活動がされていたが，その後は学生に活動を任されてきた．対象となる子どもは小学生から高校生までと幅広く，約１年の間に子どもの数も５人（内，男子１人，女子４人）から10人（内，男子４人，女子６人）へと増え，遊びを主体とした活動を週２回に渡り展開してきた．
居場所Ａでの活動を振り返ると，筆者の問題意識は「枠組み」の追求にあったように考えられる．出入り自由であり，「何をしてもよく，何もしなくてもよい」空間としての居場所では，その場の性質上，場の持ち方や関わりの基準が構造化されることは少ない．本論文は，枠組みが緩やかな居場所Ａにおける活動に焦点を当て，その発展経過を事例分析する．第１の目的として，活動の主力となる学生ボランティアに注目する観点から，子どもを「抱える環境」としての対人関係，つまり子どものサポート体制としての学生同士の連携を，共通の「枠組み」として持つ必要性を明らかにすることである．第２の目的は，一般的なキーワードとして語られる「ありのままの自分でいられる空間」「癒しの場」「何をしてもよく，何もしなくてもよい場」という居場所の持つ曖昧な性格を検討し，場の発展に伴う課題の変化について考察を加えることである．

第１に学生同士の連携に関しては，居場所の性質上，その場の構造化には限界があるという現状も併せて，居場所Ａでは，どこまで子どもと関わるのかという線引きを学生個人の判断や力量に任せられてきた．その結果，関わりの枠は個人間で如何様にも拡大され，学生個人の請け負う責任や負担は増し，更に認識の相違が子どもや居場所Ａに与える影響も少なからずあった．また，そのような状況においては，学生同士が連携し，サポート体制を築いていくという共通認識を持つことが困難であった．学生は，ボランティアとして関わるという責任性を持つと共に，自身の持つ多様な背景を考慮し，学生のスタンスを「子どもを見守る枠」として共通認識していくことが望まれる．「見守る枠」は子どもを取り囲む環境因の１つであり，それを整えることにより，曖昧な場における子どもの「守りの枠」になると筆者は考える．この「見守る枠」を持つために，学生同士での情報共有，カンファレンス，共通の子ども観，ミーティングでの振り返りが必要であり，考え合える基盤としての学生集団の連携を見直していくことが望まれる．更に学生の限界を踏まえ，「見守る枠」としての学生の連携や子ども観をチェックするスーパーバイザーの存在が必要であり，時には他機関との連携により，子どもを「見守る枠」を組み直していかなければならない．加えて，学生は期間限定のボランティアスタッフであることから，その場の流れや子どもの個人情報を如何に学生同士で引き継いでいくかという課題が挙げられる．

第２に居場所のあり方に関しては，「受容・肯定」される場であり「癒しの場」であるという一般論に，その場に関わる者が固執し続けることは危険であると筆者は考える．何故ならば，子どもの変容と共に場の性格も変容するからである．筆者は，居場所Ａにおいて浮かび上がってきた「指導」「学び」「自立支援」の３つの課題について考察を加えた．子どもの抱える社会や発達課題を考えると，居場所では，子どもが限りなく「受容」されるだけでなく，子どもへの教育的テーマが存在する．また，居場所は「癒し」の段階と「自立」への出発点があり，その場に関わる者は転換点を見極めながら，子どもに見合った関わりをし，居場所の方向性もその時々に見直されていかなければならない．社会との接点としての居場所は「依存」と「自立」が繰り返される存在として，その機能が望まれると考える．その際には，学生や親，地域との支援ネットワークが子どもを「見守る枠」として，そのあり方を問われる．

居場所Ａでの活動は，臨床家を目指す筆者にとって，個人間の対人関係に注目するだけではなく，子どもを「抱える環境」を整えることにより子どもをサポートしていくという視座の捉え直しとなった．加えて，子どもを抱える地域社会に注目する観点から，学生や親，延いては地域との連携により，地域社会に社会的支援ネットワークを築いていくという，コンサルテーション的援助の視点を鍛えることになったと言える．